

## 2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>日本人の英語使用に影響を与える社会生態学的ネットワークの検討</b> —高流動性の地域と低流動性の地域の比較によって—
キーワード	①英語コミュニケーション、②関係流動性、③心理ネットワーク分析

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	イトウ タケヒコ 伊藤 健彦
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	東洋大学 情報連携学部 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	法政大学 経済学部 准教授
プロフィール	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程社会心理学専攻単位取得満期退学。東京大学大学院在学中に、プリンストン大学大学院心理学研究科に交換留学。専門は社会心理学。

### 1. 研究の概要

本研究では、個人を取り巻く人間関係の流動性を表す関係流動性を構成する変数のネットワーク構造と、そのネットワーク構造が日本人の英語使用に与える影響、さらにはネットワークを構成する変数の中で中心となる変数を明らかにする。申請者は、東京の大学生を対象とした質問紙調査を行った上で、心理ネットワーク分析を試みた。その結果、関係流動性には新しい人に出会う頻度と、人間関係を形成・解消できる度合いという2つの下位概念があるが、東京の大学生のネットワーク構造内では、各変数が2つの下位概念のクラスターを形成しており、それぞれが英語使用に影響していることが確認された。さらに、ネットワーク構造内で中心的な役割を担っている、新しい人に出会う頻度に関連した変数が明らかとなった。本研究を通して日本人の英語使用に影響を与える中心的な要因が明らかとなり、コミュニケーションの介入研究へ示唆が与えられた。

### 2. 研究の動機、目的

人は、母語だけでなく、外国語を含む第二言語を学習し、日常生活や学校・職場で使用する。特に母語が通じない環境に置かれた場合、第二言語の使用は社会適応に関わる問題である。特定の社会環境において第二言語を積極的に使用できる人とできない人がいることが問題とされ、日本や海外において第二言語使用に影響する心理的要因の研究が膨大に行われている。私は、一貫して日本人を対象とした第二言語使用、特に英語使用に影響する心理的要因の研究を行ってきた。具体的には、日本の社会構造が他者への一般的信頼を育む構造ではないという山岸（1999）の観点から、日本人の英語使用が低いのは他者に対する一般的信頼が低いことに起因するという仮説の検証を行ってきた。大学生や社会人を対象とした調査の結果、他者への一般的信頼が日本人の英語使用にポジティブな影響を与えることが示され、日本人の英語使用が低いことは一般的信頼が育っていないことが原因であることが示唆された。最近、この一般的信頼を生むと考えられている社会生態学的要因、特に関係流動性（対人関係や集団を選択する自由度; Yuki, Sato, Takemura, & Oishi, 2013）に着目し、英語使用に与える影響を

検討している。申請者による大学生や社会人を対象とした調査の結果、関係流動性が日本人の英語使用にポジティブな影響を与えることが示され、社会生態学的要因が第二言語使用を規定していることが示唆された。このような背景から、社会生態学的要因の心理ネットワークが分かれば、日本人の英語使用への影響において中心的な役割を持つ要因が明らかとなると考え、本研究の着想に至った。

### 3. 研究の結果

R ソフトウェアを用いたネットワーク分析を行った。解析では、LASSO (least absolute shrinkage and selection operator) regularization with EBIC (minimizing the extended Bayesian information criterion) モデルを用いた。LASSO はネットワークにある他の変数を統制した上で、特定の変数間の偏相関係数を推定する方法である (Epskamp, 2017)。東京の大学生を対象とした調査データをネットワーク分析にかけた結果を図 1 に示す。この解析によって、英語使用に影響を与える社会生態学的ネットワークの構造が明らかとなった。

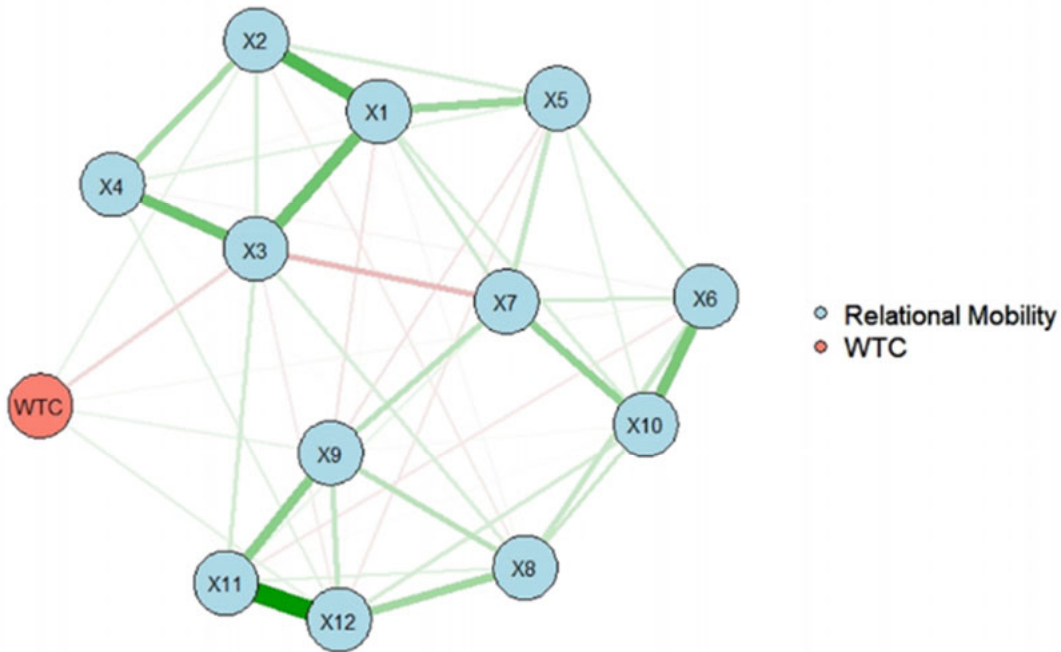


図 1 : ネットワークモデル。Xn のノードが関係流動性の変数、WTC のノードが英語使用の変数を表す

次に、どの変数がネットワーク構造の中で中心的な役割を担っているかを中心性の指標によって検討した。Strength という指標は、ある変数とつながっている全てのエッジを足した値である。Closeness という指標は、ある変数と他のすべての変数の間にある最も短いエッジの逆数を取ったものである。Betweenness という指標は、ある変数を他の二つの変数が通る最も短いパスが何個あるかを示している (Epskamp, 2017)。東京の大学生を対象とした調査データにおけるネットワークの中心性指標の値を図 2 に示す。この解析によって、社会生態学的ネットワークの中で中心的な役割を担っている変数が明らかとなった。

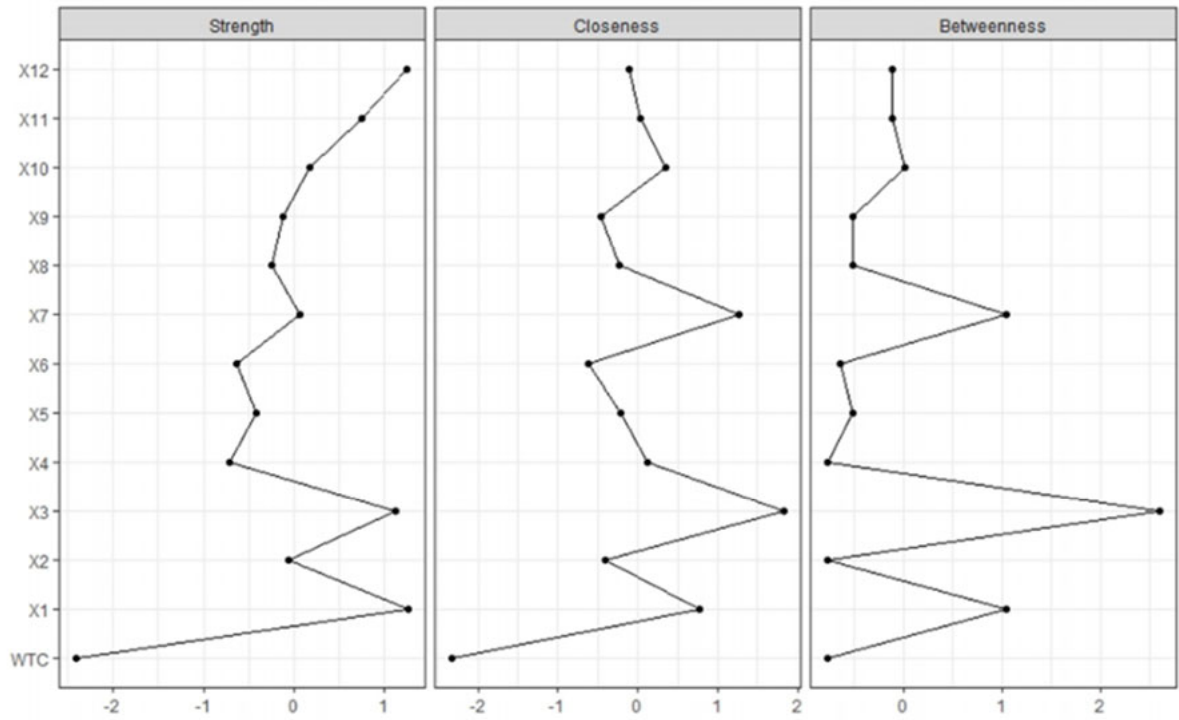


図 2 : ネットワークの各変数における中心性指標の値をプロットしたもの

再現性の問題を解決するため、ブートストラッピング法を用いた。この方法によって、推定されたエッジの重みのブートストラップ信頼区間や、サブセットを用いたネットワークの中心性指標の安定性を検証した。東京の大学生を対象とした調査データにおけるネットワークの各エッジの信頼区間を図 3、各中心性指標の安定性を図 4 に示す。この解析によって、社会生態学的ネットワークにおけるエッジの値の信頼性と、中心性指標の値の安定性が明らかとなった。

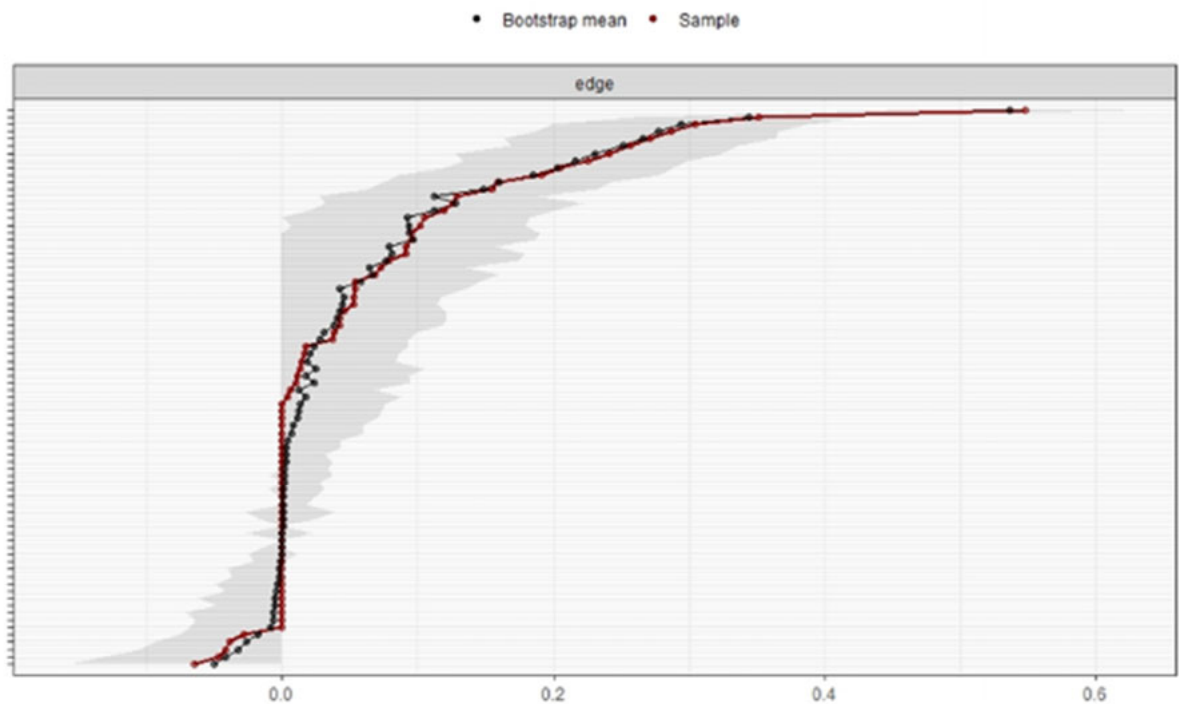


図 3 : 各エッジの信頼区間をプロットしたもの

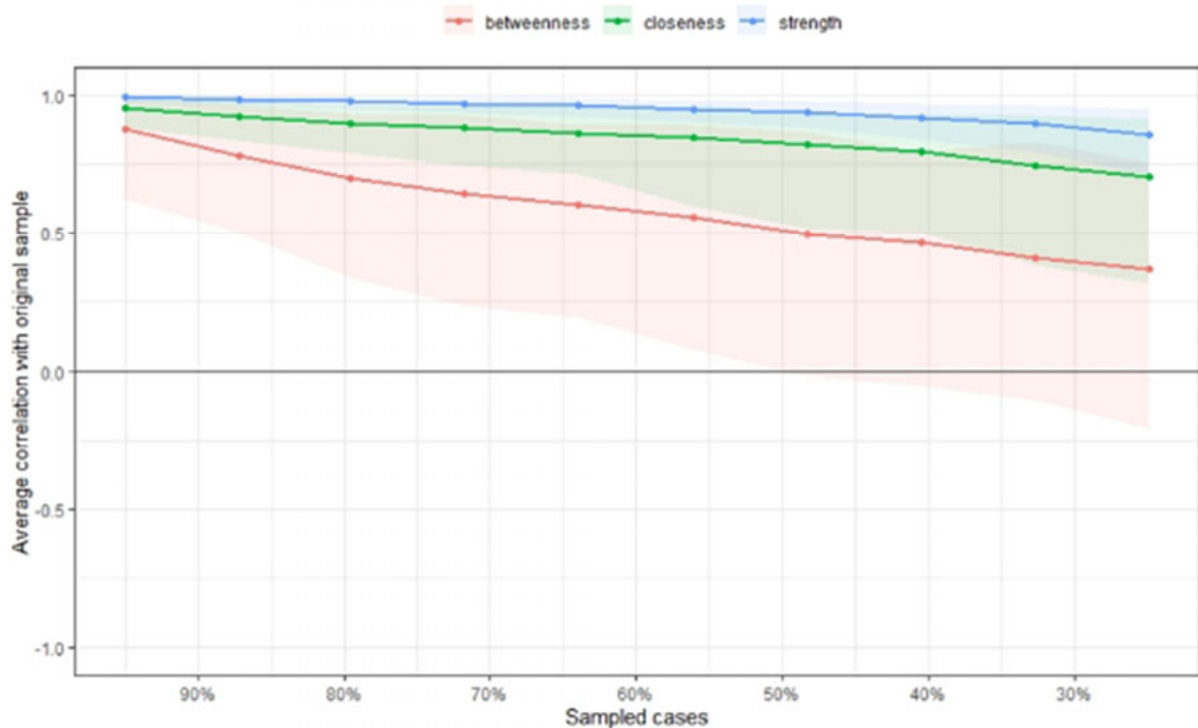


図4：各中心性指標の安定性をプロットしたもの

#### 4. 研究者としてのこれからの展望

今後も第二言語使用に影響する要因を明らかにし、言語コミュニケーションの介入研究に示唆を与えていきたい。また研究業績に関しては、海外学術誌に論文を掲載することを目標としていく。プリンストン大学大学院に留学している時に、「Publish or Perish」と言い合いながら、世界中から来た大学院生と日々研究した。その時に、海外のコミュニティと関わり合いながら研究することの重要性を知り、日本に帰国した後も、海外学術誌に論文を掲載することで情報発信してきた。自分の論文を通して、世界中の研究者と情報交換をし、より良い研究成果をあげていけたらと考えている。

#### 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究に関して支援していただいた全ての皆様に感謝申し上げます。今回の若手研究者奨励金が私にとって初めての外部競争的資金となります。この資金によって研究を滞りなく進めることが出来たのはもちろんのこと、自分が外部から資金を獲得できたことで自信となり、研究者としての未来が見えましたこと、本当に感謝しております。評価していただいた本研究の成果を海外学術誌に掲載できたことで、支援者方々の思いを世界中に届けることができたと考えております。今後もぜひ研究交流をさせていただければ幸いです。この度は本当にありがとうございました。